

# Chim ↑ Pom 問い、続け10年

ユーモアを含む手法で社会の根底を問う作品は美術ファン以外からも関心を集め、タブーに触れる表現は時に議論も呼ぶ。若手美術家集団「Chim ↑ Pom (チンポム)」は今年、結成10周年。近年は積極的に震災に向き合う彼らに、表現活動への思いを聞いた。

## 「当事者性」意識 原発事故扱う

リーダーの卯城尊太、林靖高、エリイ、岡田将孝、稲岡求、水野俊紀の男女6人からなるチンポム。国内外の展覧会に参加し、今年

はアジアの若手現代作家を支援する国際的なアワードで大賞を受けた。

2011年の震災直後、彼らは被災地に飛び込んだ。福島第一原発が見える高台で白旗に描いた日の丸を放射線マークに変える「REAL TIMES」

や、福島県相馬市の若者と互換の中で田陣を組み、一言ずつ叫ぶ「気合い100連発」といった、映像作品などを発表していく。

12年には、福島県帰還困難区域内で聞く「見に行くことができない」展覧会を発案。国内外のキュレーターや作家12組が集まり、今年3月11日から「Don't Follow the Wind」展として始めた。立ち入り制限が解けるまで見られない状況で開かれている事実が、原発事故の影響で無人

化した街への想像力を磨く。

卯城は「事故の風化は元のは強い不満を抱き、これから『当事者』とどうでない人を分けたい」という。これは人類的な問題から、距離感はそれぞれ、多くの人が当事者として関わるべきだと考えた

## 広島に空に文藝 騒動のち交流

「当事者性」への問題



自分たちで運営するスペース「Garter」にて。左からエリイ、水野、卯城、土藤隆太郎撮影



「REAL TIMES」(2011年)

## 追悼 中平卓馬

日本の現代写真史に残る先鋭的な表現活動を続けた写真家・中平卓馬さんが1日、77歳で亡くなった。その軌跡を、50年来の友人だった写真家・森山大道さんに振り返ってもらった。

「悲しそな、猫の凶鑑」というものは存在しない。1969年ごろだったが、雑談のさなか、中平卓馬の口をついたフレーズに瞬時、ぼろげんとなった。そこに中平の写真の本質を直感したからだ。その後、僕が自分の写真を相対化する指標となるつし

## した日常、明晰な輪郭得た

### ——写真家・森山大道

誘われて第2号から参加し、写真を中心に僕なりのスタンスでかかわった。

そのころの中平の作品をまとめたのが写真集「来たるべき言葉のために」(70年)。鋭敏で繊細な肉体と神経を持った1人の写真家が夜の都市や海浜をさまよる、「黙示録」のような一冊だった。その荒々しい画像はフスベレート(絶望的)なまでにクールだったが、中平自身は「おれの写真はどこかポエティック(詩的)になる」と自嘲していた。美学とか情緒が写り込むことを嫌悪していたからだろう。

中平はそれ以前に、日本の写真を草創期から振り返る「写真一〇〇年」展(88年)の編集委員として、数万点の

いない「無名」の写真だった。人一倍鋭利だった彼は、その経験を通して写真の本質的な構造と特性を見抜いてしまったに違いない。

「プロヴォーク」の写真は、画像がぶれたり画面が荒れたりしたことから「ブレボケ」と揶揄されたが、僕はそれを「新しい写真」のテーマとして提示したわけではない。写真から情緒や意味を排除した、いわば「凶鑑」としての写真を目指したのだが、実際に自分の作品となる写真との乖離に、中平のセンシティブな感性は耐えられなかったのかもしれない。70年代には少しずつ写真から遠ざかり、77年には病から記憶に障害が残った。

## バーバラ・ヘップワース展

休館

抽

を代表する彫刻家として知られるバーバラ・ヘップワースの、彫刻が中心で、写真も手がける。女性作家として、その存在感が際立つ。

や、福島真相展市の若者と互礫の中で陣を組み、一言ずつ叫ぶ「気合い100連発」といった、映像作品などを発表していく。

12年には、福島の帰還困難区域内で開く「真に行くことができない」展覧会を提案。国内外のキュレーターや作家12組が集まり、今年3月11日から「Don't Follow the Wind」展として始めた。立ち入り制限が解けるまで見られない状況で開かれている事実が、原発事故の影響で無人

化した街への想像力を喚起する。卯城は「事故の風化に地元の人には強い不満を抱えていて、これから『当事者』とそうでない人を分ける壁が出来ていく気がした。でもこれは人類的な問題だから、距離感はいずれでも、多くの人が当事者として関わるべきだと考えた。」

## 広島に空に文字 騒動のち交流

「当事者性」への問題意識

識は、08年に広島原爆ドーム上空に「ピカッ」という文字を飛行機雲で描いたことを機に抱いた。平和の意味を問い直す狙いも込めた作品だったが、被爆者の感情を無視したなどと批判が起き、被爆者団体に、事前に告知しなかったことを謝罪。その後、団体や市民と交流を続ける。

「自分たちも核兵器の当事者だと思っているが、広島の内と外、広島の中でも『当事者』とその他が分けられていて感じた」



「REAL TIMES」(2011年)



「SUPER RAT」(2006年～) いずれもCourtesy of MUJIN-TO Production

文芸春秋(中国)や宮永愛子ら12作家が参加する「Don't Follow the Wind」展を紹介する。「Non-Visitor Center」展が、東京・神宮前7ツリウム美術館で11月3日まで開催中だ。会場で「Don't」展のチケット(5千円、限定500枚)が購入でき、売り上げは画展に寄付される。月曜休館(10月12日は開館)問い合わせは画館(03・3402・3001)。

震災後、彼らが参加した展覧会を手がけたワタリウム美術館の和多利浩一代表は「アートの力を信じ、震災後の社会に積極的に向き合っている。さらに芯が入った印象がある」と話す。

## 翻弄される個人 そのまま映像

現代美術家の会田誠の周辺で出会った6人は、当初、ビデオカメラを手に街に出た。「活動的なアクションではなく、面白いことをやりたかった」と卯城。東京・渋谷でネズミを捕らえ、複製を人気のゲームキャラクターに仕立てた06年発表のデビュー作「SUPER RAT」など、「遊び」の延長のような軽やかな手法で日常に切り込む作品が評判を呼んだ。

「政治的」と評されることもあるが、卯城は「社会的だとは思いますが、何か目的を設定しているわけではない」と否定。「つらいと思い

ながら線量の高い現場にいたり、ネズミを怖がり。作品には僕たちが翻弄されている場面が映っている。たぶんこちらは、社会翻弄される個人の姿を体感し、こそなく映し出したと思うているんだと思う」

10年を振り返り、卯城エリイは「いつも全力でやり続けてきた」。昔はDVDが1枚売れるだけで喜んだ。今は、苦しいが、6人が活動できる程度に収入を得られるようになった。

作品に含まれる表現を自由に、美術展への出品などに難色を示された苦い経験もした。ギャラリーに所属しつつ、今年、自分たちで運営するスペースを高田寺に開いた。自由な表現の場を自らの手で作る試みだ。

エリイは「表現を」自覚することがないように、いろいろなスペースを作ったかな。今後の抱負を「誰にも負けない世界一の芸術家になる。それは誰かを作ること」とも、思い強い作品は誰かから贈りに感謝を述べ、卯城を超えて表現を続ける……。放射線物質みたいですよ」と話した。(丸山あかり)

ない「無名」の写真だった。人一倍鋭利だった彼は、その経験を通して写真の本質的な構造と特性を見抜いてしつたに違いない。

「プロヴォーク」の写真は、画像がぶれたり画面が荒れたりしたことから「アノボ」と揶揄されたが、僕はそれを「新しい写真」のテーマとして提示したわけではな。写真から情緒や意味を排した、いわば「凶鑑」としての写真を目指したのだが、実際に自分の作品となる写真の乖離に、中平のセンチメンタルな感性は耐えられなかった。70年代に写真から速やかに記憶に障

## バーバラ・ヘップワース展

## 抽象彫刻の開拓者 再評価

ヘンリー・ムアと並び英国を代表する女性彫刻家で、抽象彫刻で知られるバーバラ・ヘップワース(1903〜75)。粘土でモデルを作らず、木・石・ブロンズといった素材を用い、ノミで直接彫る手法をとった彼女の、彫刻や珍しいテキスタイル作品、写真など百点以上を展示する回顧展「バーバラ・ヘップワース：現代社会のための彫刻」が、テート・ブリテンで開催中だ。10月25日まで。

ンから英国南西部のセント・アイブスに移住した。陶芸家バーナード・リーチと濱田庄司が日本式の登り窯を築くなど、国内外の芸術家に愛された地で、ヘップワースは地元の人々や風景を題材に彫刻制作を続けた。展覧会場には、20年代の大理石の具象彫刻から30年代の純粋な抽象彫刻、60年代のクロエ作品まで年代順に展示されている。つらいと思い

る。なかでも、高さ1.5メートルの「カブド・フォーム(カブド・フォーム)」など光沢のある大理石製の木材を使った作品は、ずっしりと存在感がある。側面をみたくなるような温かみのあふれる木製の部分と、緊張感あふれる部分が対照的で、その力強い。米ニューヨークの国連ビル外に立つ「シングル・フォーム(仮)」は代表作。国内的な評価も高く、ヘップワースは、戦前戦中戦後を通じて、